

# 近代岡山県における産業構成

## Industrial Composition in Present-day Okayama Prefecture

(2020年3月31日受理)

伊藤末高

Suetaka Itou

Key words : 近代日本, 岡山県, 産業構成, 産業革命, 紡績業

### 抄 録

日本の産業革命期において、明治政府の主導によって工業化が推進された。この工業化の波によって、中央だけではなく地方でも多くの企業が設立された。

この企業勃興は、当時の岡山県においても例外ではない。地域の3人の青年が、特産物の実綿を活用した紡績企業を興すべきであり、これによって地方の富国を目指すべきと訴え、現在の倉敷市に倉敷紡績が設立された。この倉敷紡績の設立、設備の拡大、そして工場の新設などによって、倉敷を含む備中の産業構成の工産比率は上昇した。

そこで、近代岡山県における産業構成及びその変化を倉敷紡績の設立趣旨と岡山県内における拡大過程を確認し、倉敷紡績を含む繊維産業と岡山県の産業構成の関係性について考察する。

### 1. はじめに

1870年代前半、明治政府は「富国」をスローガンとして掲げ、中央政府主導による工業化を目指した。しかし、投資資金の不足と工業プロジェクトの行き詰まりによって政府主導の工業化は消極化した。1880年代後半になると、中央だけではなく地方でも企業勃興が生じ、日本は産業革命<sup>(1)</sup>の時代に入った。

中村尚史<sup>(2)</sup>は、中央と地方、官と民の双方における富国論の存在、地方の富国論における国家主義と地方主義の結合という点に注目し、地方工業化に対する肯定的な意識である地方工業化イデオロギーの形成と共有が工業後進国である日本が産業革命を達成するための要件とした。地方の富国論においては、地方政治家や地方企業家が地方の工業化が富国の基礎とする地方工業化イデオロギーの共有が重要であると指摘し、地方の事例を分析し、官僚、地方企業家、地方資産家による地方における

企業勃興を実証している。

地方という観点からすると、岡山県においても1889年に倉敷紡績が設立された。この倉敷紡績に関連する代表的な先行研究として、村上はつ<sup>(3)</sup>、大津寄勝典<sup>(4)</sup>などによる倉敷紡績の経営展開、兼田麗子<sup>(5)</sup>による二代目社長の大原孫三郎の社会福祉事業、土屋喬雄<sup>(6)</sup>による大原孫三郎の経営理念などがあげられる。しかし、いずれの先行研究においても倉敷紡績の設立と岡山県の産業構成の関係性についての分析は十分とはいえない。

そこで本稿では、倉敷紡績の設立趣旨を考察し、倉敷紡績設立の前提となる岡山県の産業構成とその後の変化を分析・検証することを目的とする。そのため、本稿の構成は、まず倉敷紡績の設立趣旨及び岡山県における拡大の推移を確認する。次に、明治初期の岡山県の産業構成から全国的な位置付け及び岡山県内の産業構成を分析する。最後に岡山県内の産業構成の変化と倉敷紡績による影響を考察する。なお本稿では、岡山県の産業構成に

関する先行研究や倉敷紡績の社史などから分析することとし、これらによって両者の関係性が多少なりとも明らかになると考えられる。

## 2. 倉敷紡績の設立趣旨と拡大推移

### 2.1 紡績所設置案

倉敷紡績の設立を企画したのは、倉敷の大橋澤三郎(以下「大橋」)、小松原慶太郎(以下「小松原」)、木村利太郎(以下「木村」)の3人の青年<sup>(7)</sup>であり、地方産業の開発について討議した。大橋は内外の経済情勢から紡績所設置の必要性を説いて小松原を説得し、木村は経済関係資料を集め、「紡績所企業計画」を作成した。1886年12月19日、窪屋郡役所、倉敷警察署開設祝賀の官民合同親睦会において、小松原は【史料】のような紡績所設置案を説いた。

#### 【史料】紡績所設置案

嗚呼、満場ノ諸君ヨ。仰イデ皇天ノ廣キヲ望ミ、伏シテ本郡ノ景況ヲ察セラレヨ。①土地肥沃ニシテ物産繁殖シ、加フルニ金満富豪ノ家多く、實ニ財産ハ縣下上等ノ地位ヲ占ムト謂フモ敢エテ過賞ニ非ザルナリ。

美ナル哉窪屋郡、愛スベキ哉窪屋郡。此ノ愛ス可キ沃土ニ生活スル我々同胞諸君ハ實ニ幸福ト謂ハザルヲ得ズ。然ルニ今ヤ之ニ加フルニ聰明老練ノ聞アル森田郡長閣下ノ赴任アリ、英敏活潑ノ譽アル警部大塚君ノ來署アルハ我々ノ有志諸君ト共ニ大ナル喜トスルノミナラズ、本郡人民ノ幸福ヲ一層増加スルモノト謂ハザルヲ得ザルナリ。

嗚呼諸君ヨ、余ハ茲ニ諸君ト共ニ親睦結合シ、コノ美ハシキ郡部ヲシテ益々改良ヲ加ヘ進歩ヲ圖ラントス。而シテ之ガ進歩ヲ企圖センニハ茲ニ②一大工業ヲ興シ殖産ノ事業ヲ盛ニスルニアリ。一大工業トハ何ゾヤ、曰ク、諸君ノ夙ニ了知スル紡績機械所是ナリ。

見ヨ、諸君ハ本郡物産中何ヲ以テ最大ト爲スヤ。③第一ハ米穀ナリ、而シテ是ニ次グモノハ即チ棉ナリ。去ル十五年度本縣勸業課ノ調査ニヨレバ、備中棉産出高百七十六萬四千三十斤ナリト。之ヲ昨今ノ価格ニ算スレバ殆ド十八萬圓餘ノ巨額ニ達シ、而カモ我ガ窪屋郡ハソノ過半ヲ占メ、且ツ棉質ハ皇國中最良ノ譽アリト聞ケ

リ。諸君、此ノ貴重ナル物産ヲ徒ニ産出ノ儘ニ他ニ運搬輸出スルヨリ、寧ロ④工業ヲ起シ之ヲ紡糸ニ製造シ他ニ運輸スルトキハ、一ハ以テ本郡ノ昌榮ヲ醸成シ、以テ貧民救済ノ一助トナリ、一ハ以テ此ノ善良ナル物産ヲシテ益々光澤ヲ發揚セシムルナリ。コレ實ニ一舉兩得ノ策ト謂フモ決シテ過言ニアラザルヲ信ズ。然ルニ斯クノ如キ有益ナル事業ヲバ⑤因循估息ノ故ヲ以テ徒ニ拱手放任セルハ、眞ニ長大歎息ノ至リニ堪エザルナリ。

奮起セヨ諸君、⑥愛國ノ精神ヲ興起セヨ諸君、希ハ相携ヘテ國益ノ事業ヲモウケ、貧民救済ノ業ヲ興サンコトヲ。終リニ余ガ拙ナルト辭ノ不敬ナルヲ咎メズ、幸ニ余ノ切々タル愛國ノ精神ヲ諒察セラレムコトヲ。頓首再拜シテ唯々願望スル者ハ窪屋郡ノ一小民小松原慶太郎也。

(出典) 倉敷紡績株式會社社史編纂委員『回顧六十五年』倉敷紡績株式會社、1953年、pp. 13-14。(番号及び下線筆者)

冒頭の①では、倉敷地域を含む窪屋郡の農産物の豊かさ、岡山県の上位に位置する地主の存在を認識していたこと、②及び③からは、窪屋郡の工業化実現のために倉敷の特産物である綿を利用することを前提条件としていることが確認できる。また、④は、紡績所設立による工業化を図ることで、地域の住民を経済的に支えることができるというものである。さらに、⑤については、紡績業が近世以来の在来的性格の強い産業だからといってこのまま何もしないのでは経済発展が望めるものではなく、工業による経済発展を望むべきであるということの意味している。最後に⑥から、地元特産物を活用した紡績所の設置が地域の経済的發展を導くものであり、地方と住民の両方を豊かにする事業として位置付けている。つまり、地元綿を活用した紡績業による地方の工業化を目指すことが紡績所設置案の趣旨であるといえる。

これらのことから、小松原は窪屋郡の特産物である地元綿を活用した工業を興すことで地方における富国、つまり紡績業による工業化を図ることで地域経済の活性化を促進し、それが地域住民の生活レベルを高めるということを目指していたのである。

### 1.2 倉敷紡績の設備拡大推移

倉敷紡績の設備の拡大について、【表1】によって岡

【表1】倉敷紡績の拡大推移（1896年－1918年）

年 月* <sup>1</sup>	事 項	増 錘 数	累 計 錘 数	全 国 順 位
1886年12月	小松原慶太郎による紡績所設置案の演説			
1889年10月	工場竣工，運転開始	4,472錘	4,472錘	
1892年3月	第1次増設	5,504錘	9,976錘	
1893年7月	第2次増錘	688錘	10,664錘	
1894年7月	第3次増設	4,816錘	15,480錘	
1895年7月	第4次増設	6,536錘	22,016錘	13位/74社
1905年4月	第5次増設	7,568錘	29,584錘	18位/48社
1908年11月	吉備紡績所取得（倉敷紡績玉島工場誕生）	29,336錘	58,920錘	13位/39社

（出典）倉敷紡績株式会社社史編纂委員『回顧六十五年』倉敷紡績株式会社，1953年，参考諸表，三，主要事項年譜，pp. 23-31，東京大学東京大学社会科学研究所調査報告第11集『倉敷紡績の資本蓄積と大原家の土地所有 第一部』，1970年，p. 7より作成。

\*<sup>1</sup> 第1次及び第5次増設の年月は臨時株主総会，第2次，第3次及び第4次増錘・増設の年月は定時株主総会の開催年月を示す。

山県内において実施された増設等の推移を確認しよう。

倉敷紡績は，設立から1905年までに合計5回の増設・増錘を実施した。倉敷紡績の生産設備は，第2次増錘によって10,664錘となり，設立から4年で1万錘規模の紡績所となった。第5次増錘は，第4次増設から10年弱の期間を経て実施され，この増錘により倉敷紡績は3万錘近い規模の工場となった。

ところで，1908年当時の倉敷紡績の錘数は29,584錘である。この錘数<sup>(8)</sup>を確認すると，岡山県内では上位に位置し，全国レベルでは1897年では全国74社中13位であった。しかし，1904年になると全国48社中18位に下がっている。また，全国の紡績所の錘数は977,701錘であったことからすると，その3.0%を占めるに過ぎない規模であった。この当時の岡山の紡績所の状況は，1900年岡山紡績と西大寺紡績の合併，1901年柏崎紡績の大阪の半田綿行への譲渡，1903年下村紡績の破産，1904年北川商店による味野紡績の買収，1907年絹糸紡績による岡山紡績と備前紡績の吸収合併など次々と合併・再編が行われていた。

倉敷紡績は1908年11月に吉備紡績所の工場及び設備一式を取得し，1910年時点で全国では39社中13位，岡山県内では1位の規模の紡績所となった。その後も，倉敷紡績は万寿工場，万寿第二工場，そして万寿第三工場と拡大しただけではなく，県外にも拠点を増加させていったのである。

## 2. 岡山県の産業構成

### 2.1 岡山県の全国的な位置

倉敷紡績は，現在の岡山市の西南方面，明治期には都窪郡の西南端に位置する倉敷村に設立された。気候は温暖で降雪は少なく，高梁川から引いた用水路により良田に恵まれ，農家百数十戸を要する一部落であった<sup>(9)</sup>。

倉敷は徳川時代には天領として80年ほど栄えたが，元禄以降は玉島港の勃興によって，倉敷の海運は次第に衰退していった。海運に代わって倉敷を発展させたのは，近隣の米や綿の集積地としての機能であった<sup>(10)</sup>。綿とともに繁昌した造り酒屋は，明治維新による社会情勢の変化，経済事情の変化により衰退し，明治になっても繁昌していたのは「米屋と棉屋のみ<sup>(11)</sup>」であった。

明治期の岡山県の産業構成について，【表2】により1888年における岡山県の全国的な位置づけと概略をみることにしよう。

物産全体における全国中の比率では，繊維産業が盛んであった長野県が6.28%で1位であり，最下位は宮崎県で0.93%である。岡山県は2.9%で13位に位置している。上位に位置する長野県，兵庫県，東京府などの物産比率から，工産比率が高い府県が物産全体の比率の上位に位置していることが確認できる。岡山県の物産比率をみると，工産比率は2.53%で13位と上位県と比較して低いものの，農産比率が3.04%で9位<sup>(12)</sup>，水産比率が3.40%

【表2】各府県の物産占有率・物産部門別構成（1888年）

	全国中の比率 (%)				各府県の構成比 (%)			
	合計	農産	水産	工産	合計	農産	水産	工産
1. 長野県	6.28	4.53	0.36	10.98	100.0	48.2	0.2	51.6
2. 兵庫県	5.04	4.09	4.62	7.25	100.0	54.3	3.3	42.4
3. 埼玉県	4.13	4.67	0.51	3.32	100.0	75.8	0.4	23.7
4. 千葉県	3.93	4.36	9.95	2.22	100.0	74.1	9.2	16.7
5. 東京府	3.81	1.18	3.74	9.77	100.0	20.7	3.6	75.7
<b>13. 岡山県</b>	<b>2.90</b>	<b>3.04</b>	<b>3.40</b>	<b>2.53</b>	<b>100.0</b>	<b>70.1</b>	<b>4.3</b>	<b>25.7</b>
16. 大阪府	2.65	2.68	1.09	2.77	100.0	67.6	1.5	30.9
19. 広島県	2.44	2.55	3.84	2.03	100.0	69.9	5.7	24.4
20. 愛媛県	2.38	2.48	2.09	2.17	100.0	69.9	2.2	26.9
39. 宮崎県	0.93	1.25	0.88	0.20	100.0	90.2	3.5	6.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	66.9	3.6	29.5

（出典）神立春樹「明治二十一年農事調査」にみる産業の府県別状況『岡山大学経済学会雑誌』27（4），1996年，p.5より作成。

で11位となっている。つまり、岡山県の場合、上位府県と比較すると突出した産業によって総合的に13位に位置したわけではなく、比較的バランスのとれた産業構成で全体として39府県中13位と上位に位置することができたといえる。

各府県内の構成比をみると、工産構成比が全国平均の29.5%を上回るのは、東京府75.7%、長野県51.6%、兵庫県42.4%、大阪府30.9%であり、府県内における工産構成比が高い府県が総じて上位<sup>(13)</sup>に位置していることがみてとれる。これに対し、岡山県の場合、農産構成比70.1%、水産構成比4.3%であり、それぞれの全国平均66.9%、3.6%を上回っているが、工産構成比25.7%は全国平均の29.5%を下回っている。

つまり、岡山県内の産業構成比を全国平均と比較した場合、工産部門よりも農業・水産部門の構成比が高く、さらに農業部門の構成比が高いことから、岡山県の主要部門は農業・水産部門であり、特に主要物産は農産であったといえる。

## 2.2 明治初期の岡山県内における産業構成

明治初期の岡山県内及び倉敷村を含む窪屋郡における農産物の生産について、1877年の岡山県における農産物生産額と全国の農産物構成及び主要農産物の生産額を示

した【表3】によって確認しよう。

倉敷地域が含まれる備中の実綿の構成比8.9%は、岡山県全域の実綿の構成比6.6%を上回っており、全国における実綿の構成比3.4%の約2.6倍である。また、備前、美作の実綿の構成比は、それぞれ6.6%、2.6%であることから、備中の実綿構成比は、全国、岡山県、県内各地域のすべてを上回っている。また、備中における米の構成比は58.6%と岡山県全体の平均65.3%を下回っているが、全国平均56.2%を上回っている。さらに、備中における麦の構成比は17.0%であり、備前の12.3%、美作の11.1%、岡山県の平均13.8%、全国平均の11.2%も上回っていることが分かる。

次に、備中の実綿生産額21.6万円に対し、備前、美作の実綿生産額は17.6万円、3.6万円であり、備中の生産額が最も高くなっている。備中の実綿生産額は、岡山県全体の生産額39.2万円の46.3%を占めている。さらに、備中の実綿生産額は、同地域の全農産物生産額253.5万円の8.9%、特有農産物においては57.0%の生産額を占めており、全農産物についてみると、米、裸麦に続き3番目、特有農産物では最も高い生産額となっている。

最後に、備中における農産物の見積収穫額を示した【表4】によって、備中内四郡の農産物の状況、窪屋郡における農産物の地域的特性を概観し、岡山県の農産物生産

【表 3】明治初期岡山県地方別農産物構成比及び生産額（1877年）

(単位 構成比：%，生産額：万円)

		備 中		備 前		美 作		全 県		全 国 構成比
		構成比	生産額	構成比	生産額	構成比	生産額	構成比	生産額	
普通農産物	米	58.6	131.3	69.8	161.7	68.0	86.6	65.3	379.6	56.2
	麦	17.0	10.9	12.3	25.9	11.1	5.6	13.8	42.4	11.2
	雑穀	4.6	22.6	1.9	23.7	5.3	5.5	3.7	51.8	6.6
	その他	4.6	40.8	3.1	22.8	0.4	18.2	3.0	81.8	6.7
	小計	84.8	205.6	87.1	234.1	84.8	115.9	85.8	555.6	80.7
特有農産物	実綿	8.9	21.6	6.6	17.6	2.6	3.6	6.6	42.8	3.4
	菜種	2.5	6.1	4.8	12.8	8.7	11.8	4.8	30.7	3.2
	その他	3.8	10.2	1.5	17.8	3.9	6.5	2.8	34.5	12.7
	小計	15.2	37.9	12.9	48.2	15.2	21.9	14.2	108.0	19.3
合計	100.0	243.5	100.0	282.3	100.0	137.8	100.0	663.6	100.0	

(出典) 神立春樹「明治初期岡山県の産業構成」『岡山大学経済学会雑誌』14 (3・4), 1983年, pp. 175-205。p. 192, 及び岡山県史編纂委員会『岡山県史 第十卷 近代 I』岡山県, 1986年, p. 273より作成。なお, 原表は, 『明治10年全国農産表』による。

【表 4】明治初期倉敷地域四郡農産表（1877年）

(見積収穫額：万円)

		窪屋郡	都宇郡	児島郡	浅口郡	合計
普通農産物	米	18.1	22.9	20.9	12.9	74.8
	糯米	1.2	1.4	1.6	0.8	5.0
	裸麦	2.9	1.8	6.1	6.6	17.4
	その他	0.9	0.3	9.5	8.5	19.2
	小計	23.1	26.4	38.1	28.8	116.4
特有農産物	実綿	4.6	0.9	3.8	7.5	16.8
	菜種	0.8	0.8	1.9	0.5	4.0
	その他	1.2	1.3	10.4	0.6	13.5
	小計	6.6	3.0	16.1	8.6	34.3
合計	29.7	29.4	54.2	37.4	150.7	

(出典) 倉敷市史研究会『新修倉敷市史 5 近代 (上)』倉敷市, 2002年, p. 281より作成。

に対する窪屋郡の概要を分析しよう。

窪屋郡の実綿の見積収穫額は4.6万円であり, 同地域の全農産物の15.5%, 特有農産物では69.7%を占めている。窪屋郡において, 全農産物の中で最も見積収穫額が多いのは, 米の18.1%であり, 実綿はこれに次ぐ2番目に高い見積収穫額となっている。また, 窪屋郡の実綿の見積収穫額は, 四郡の中で浅口郡の7.5万円に次いで2番目に高い収穫額である。窪屋郡において最も高い見積

収穫額を示す米については, 四郡中3番目に位置している。さらに, 普通農産物, 特有農産物の中では3番目に位置する農産物が多い。なお, 児島郡の実綿の見積収穫額3.8万円であり, 窪屋郡に次いで3番目であるが, その他項目には, 甘薯6.8万円 (普通農産物), 食塩9.8万円 (特有農産物) が含まれている。また浅口郡は, その他項目に甘薯5.3万円 (普通農産物) が含まれている。

これらのことから, 明治初期の窪屋郡においては, 他

【表5】各府県の物産占有率・物産部門別構成（1919年）

	変動幅 対1888年	全国中の比率（％）				各府県の構成比（％）			
		合計	農産	水産	工産	合計	農産	水産	工産
1. 大阪府	15	10.03	1.69	0.78	16.49	100.0	6.96	0.17	92.87
2. 兵庫県	0	8.22	3.37	3.35	11.95	100.0	16.93	0.87	82.20
3. 東京府	2	7.12	1.05	2.06	11.74	100.0	6.10	0.62	93.30
4. 愛知県	—	5.71	3.82	3.11	7.19	100.0	27.67	1.16	71.16
5. 長野県	-4	3.91	3.97	0.55	4.00	100.0	41.92	0.30	57.78
10. 岡山県	3	2.46	2.96	1.55	2.11	100.0	50.15	1.35	48.50
12. 広島県	7	2.17	2.37	2.99	2.00	100.0	45.08	2.94	51.97
15. 愛媛県	5	2.08	2.15	2.22	1.95	100.0	43.66	2.33	54.00
16. 埼玉県	-13	2.04	2.92	0.09	1.29	100.0	62.36	0.10	37.54
21. 千葉県	-17	1.74	3.08	4.57	0.65	100.0	73.27	5.63	21.10
47. 沖縄県	—	0.59	1.23	0.89	1.12	100.0	85.45	3.20	11.35
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	41.39	2.14	56.47

（出典）神立春樹「1919（大正8）年の産業の府県別状況」『岡山大学経済学会雑誌』28（1），1996年，p.46及び【表2】より作成。なお，原表は、『第36次農商務統計表』及び『大正8年工場統計表』による。

の3郡と比較して，米，実綿が主たる農産物であったといえる。さらに窪屋郡が含まれる備中は，浅口郡と窪屋郡の実綿生産によって，岡山県の実綿生産額の50.5%を占めている。つまり，全国平均を上回る岡山県の実綿生産は，浅口郡と窪屋郡によって支えられていたといえ，小松原が提起した紡績所設置案は，地元の産業構成を十分に分析したうえで提起されたものであるということが実証できる。

### 3. 岡山県における産業構成の変化

#### 3.1 全国的な位置づけの変化

1919年時点における各府県の物産占有率及び物産部門別構成を示した【表5】によって，岡山県の全国における位置づけと概要を確認しよう。

物産全体における全国中の比率はで見ると，1位は大阪府で全国の10.03%を占めている。1位から3位の大阪府，兵庫県，東京府までで全国の25.37%であることから，この3府県で全国の4分の1強を占めていることになる。産業別にみると，大阪府の工産は16.49%，兵庫県は11.95%，東京府は11.74%を占め，全国の工産の40.18%を占めている。4位の愛知県7.19%，5位の長

野県4.00%まで含めると全国中に占める工産の占有率は51.37%となり，全国の半数以上を占めている。また，各府県の構成比をみると，大阪，東京の工産比率は90%を超え，兵庫では82.2%，愛知でも71.16%を超えている。この工産の状況から，工業の特定都府県への集中化，あるいは特定都府県での工業化の進展といった傾向をみることができる。

このような工業の集中化の中で岡山県の状況を確認すると，全国中の比率では10位に位置しており，全国中の占有率は2.46%である。産業別では農産比率が最も高く2.96%であり，工産の2.11%，水産の1.55%と続いている。産業別構成比をみると農産比率が50.15%と高いが，工産比率が48.5%であり，両者が均衡していることが確認できる。

また，1888年に16位であった大阪府が1919年には1位，東京府は5位から3位に上昇しており，岡山県は13位から10位に上昇していることが確認できる。逆に，1888年に1位であった長野県が5位に順位を下げ，埼玉県は3位から16位，千葉県は4位から21位に大幅に順位を下げている。

順位を上げた府県に見られる特徴は，工産比率の上昇幅が大きいことがあげられる。特に，16位から1位に

【表6】岡山県主要工業製造生産額の推移（1895年－1919年）

	1895年	1905年	1919年	1919年			
				製造戸数	職工数	全国中	
						ウェイト	順位
	円	円	円	戸	人	%	位
紡績	2,685,077	—	59,596,510	12	12,426	6.9	5
製糸	1,200,500	622,318	8,203,421	274	—	0.86	26
織物	1,029,506	2,459,032	42,964,082	2,426	14,786	2.2	16
陶磁器	36,548	23,215	142,637	87	183	0.22	21
煉瓦	—	363,481	2,548,798	40	992	7.5	4
瓦	—	126,462	1,146,931	417	1,108	2.7	10
和紙・洋紙	131,694	656,382	3,644,356	295	1,275	3.58	—
畳表・莫蔞・花筵	2,468,415	3,404,002	8,385,127	11,019	16,920	26.5	1
麦稈経木真田	—	1,571,242	6,354,356	37,377	131,868	34.2	1
機械製粉	—	129,727	1,681,085	398	—	0.24	13
マッチ	20,435	74,319	459,400	3	268	1.0	5

（出典）神立春樹「明治期岡山県地方工業の動向について—その位置づけと検討の方向—」『岡山大学経済学会雑誌』3（3），（4），1972年，p.183より作成。なお，原表は，（第12次，第22次，第36次）『農商務統計表』によるものであり，紡績は1895年を除き『工場統計表』による。

なった大阪府の工産比率は61.97%上昇している。逆に，順位を下げた長野県，千葉県の上昇率は，それぞれ6.18%，4.40%の微増にとどまっている。また埼玉県の場合，工産比率は13.84%上昇させたが，全国中の変動幅と比較すると半分程度の変動となっている。

岡山県の場合を分析すると，工産比率は22.80%上昇しているが，全国中の変動幅である26.97%を下回っている。しかし，順位は全体での順位は47府県中10位であり，順位は3つ上昇していることが確認できる。これは，大阪府や兵庫県など大幅に工産比率を上昇させた府県が，工産比率の全国的な平均を押し上げたことが原因であると考えられ，岡山県の22.80%という上昇は，相対的に高い上昇率であったと考えられる。

1919年時点の岡山県の工産状況について，神立<sup>(14)</sup>は，綿糸紡績は全国の6.6%を占めて全国5位に位置し，綿織物が全国6位であることから，岡山県は綿工業県の一つであったと指摘している。この指摘からすると，綿工業が工産比率を上昇させ，農産比率を19.95%低下させたといえるであろう。しかし岡山県の農産比率は，上位10府県の中で最大であり，12位の広島県の農産比率

45.08%，15位の愛媛県43.66%よりも高い。また，岡山県の場合は，綿工業を中心に工産比率は上昇したが，依然として農産比率は高く，相対的にみると農業県であったといえるであろう。

### 3.2 岡山県内の概要

岡山県内における産業構成の推移について，主要工業製造生産額の推移を示した【表6】で確認しよう。

工業については，1895年から1919年まで紡績業が最大のウェイトを占めており，全国中では6.9%を占め，5位に位置している。紡績業以外で全国中における岡山県で顕著な産業<sup>(15)</sup>として，煉瓦が4位，畳表・莫蔞・花筵が1位，麦稈経木真田が1位に位置していることなどがあげられるであろう。特に，畳表・莫蔞・花筵は，1895年は織物業の2倍以上の生産額を示しており，紡績業に匹敵する産業である。また，1905年においても織物業を上回る生産額であることからすると，当時の岡山県の最重要物産であったといえる。さらに，1919年には織物業が畳表・花筵を上回り，紡績業に続く大きさとなっている。また，麦稈経木真田は1919年時点で製造戸数が

【表7】岡山県地域別物産額構成（1874年－1914年）

		1874年			1914年		
		備中	備前	美作	備中	備前	美作
構成	農産	67.6%	69.2%	59.5%	39.6%	32.9%	62.3%
	畜業	2.0%	0.1%	10.6%	1.2%	1.1%	2.3%
	水産	1.8%	3.9%	0.1%	1.6%	5.7%	0.4%
	林産	1.4%	2.5%	4.4%	3.3%	2.4%	7.7%
	工産	25.4%	24.2%	22.9%	50.8%	54.2%	25.6%
	鉱産	1.8%	0.1%	2.5%	1.7%	3.7%	1.7%
実額	備中	5,784,167円		47.9%	37,050,288円		39.9%
	備前	3,603,546円		29.9%	42,361,434円		45.7%
	美作	2,685,783円		22.2%	13,320,292円		14.4%
	合計	12,073,496円		100.0%	92,732,292円		100.0%

（出典）神立春樹『産業革命期における地域編成』御茶の水書房、1987年、p.54より作成。なお、原表は、『明治7年府県物産表』『大正3年岡山県統計書』によるものであり、1874年の備中は備後の一部を含んだ小田県分である。

最も多く、岡山県内では5番目の生産額となっているが、岡山県内の産業では対全国比で34.2%を占め、最も高いことが確認できる。

次に1874年と1914年を比較した【表7】によって、備中、備前、美作の産業構成を分析しよう。

1874年の産業構成は、備中、備前、美作とも農産比率が最も高く、備前の69.2%、備中の67.6%、美作の59.5%となっており、いずれも農産が主要産業であったことが分かる。工産の状況は、備中25.4%、備前24.2%、美作22.9%であるが、美作については10.6%を占める蓄業が盛んであったということが確認できる。また、実額では備中の最も高く、岡山県全体の47.9%を占めており、次いで備前の29.9%、美作の22.2%となっている。つまり、1874年における岡山県内の備中、備前、美作の実額の点では差異があるが、物産構成という点では同じような産業構成をしていたといえる。

1914年の構成をみると、備中、備前は工産比率が最も高く、それぞれ50.5%、54.2%となっており、美作は農産比率が最も高く、62.3%である。これにより、備中、備前の農産比率は、それぞれ39.6%、32.9%となり、美作の工産比率は25.6%になっていることが確認できる。その他の産業については、備前は水産、鉱産の比率が他と比較して若干高くなっており、美作は畜業、林産の比

率が高くなっている。

1874年と1914年の産業構成を比較すると、備中と備前における工産比率の上昇が顕著である。農産比率では、備中は28.0%、備前は36.3%低下し、工産比率では備中は25.4%、備前は30.0%上昇している。備中と備前に対して美作の状況をみると、工産比率は2.7%と微増であるが、農産比率は2.8%上昇している。また、備中と備前の状況を比較すると、1874年では備中の工産比率が1.2%上回っていたが、1914年になると備前が3.4%上回っており、工産比率において備中と備前が逆転していることが確認できる。

備中、備前、美作の実額を1874年と1914年で比較すると、備中は6.41倍、備前は11.76倍、美作は4.96倍となっており、備前が全県の7.68倍を上回っている。また、1914年は、備前が全県の45.7%を占めて最大であり、次いで備中39.9%、美作14.4%となっている。1874年と比較した場合の全県での占有率は、備前が15.8%増加し、備中は8%減少、美作は7.8%減少している。つまり、工産比率を大幅に上昇させたのは備前と備中であるが、特に備前が岡山県の実額を押し上げていたといえる。

これらの岡山県の工業製造生産額から紡績業の発展が目覚ましいことが確認できるが、その他にも織物業、畳表・莫莖・花莖、麦稈経木真田、煉瓦などの重要な産業



【表 8】備中と備前の綿糸製造高（1897年－1919年）

(単位：千貫)

	1897年	1906年	1910年	1917年	1919年
備 中	1,353	2,618	2,340	4,538	4,975
(倉敷紡績)	(673)	(981)	(1,862)	(3,919)	(4,326)
備 前	852	2,423	2,356	2,957	2,802
合 計	2,205	5,041	4,696	7,495	7,777

(出典) 下記『岡山県統計書』により作成。

- ・1897年：『明治三十年岡山縣統計書』岡山県，1898年，p. 92。
- ・1906年：『明治三十九年岡山縣統計書』岡山県，1907年，p. 345。
- ・1910年：『明治四十三年岡山縣統計書』岡山県，1912年，p. 231。
- ・1917年：『大正六年岡山縣統計書』岡山県，1919年，pp. 308-311。
- ・1919年：『大正八年岡山縣統計書』岡山県，1921年，pp. 364-367。

が存在していた。また、1874年では備中、備前、美作とも農産比率が高く、岡山県は農業県といえる状況であった。つまり、岡山県内における工業化は岡山県全域で進んだわけではないことが分かる。

しかし1914年になると、備中、備前の工産比率が上昇し、美作は依然として農産比率が高い状態であった。この点について、神立<sup>(16)</sup>は、岡山県が繊維工業県として終始したこと、南部の発展に対する北部の停滞といった地域格差、という2つの要因を指摘し、岡山県南部の工業化は、紡績業を含む繊維産業の動向が岡山県の工業化を左右していたとしている。

### 3.3 綿糸製造高の比較

前述したように、倉敷紡績は増設、吉備紡績所取得、工場建設などにより拡大し、備中の工産比率も高くなった。しかし、【表 7】の1914年時点では、備中の工産比率が備前を下回っている。そこで備中と備前の紡績所における綿糸製造高を【表 8】で確認しよう。

1897年では備中が備前を大きく上回っているが、1906年、1910年では同程度の製造高であり、倉敷紡績の製造高が急増している。この倉敷紡績の製造高が急増している要因としては、1908年に吉備紡績所を取得したことがあげられる。1910年時点における倉敷紡績の製造高は、備中の79.6%、合計の39.7%を占めていた。

1917年と1919年では、再び備中が備前を大きく上回るようになった。倉敷紡績は万寿工場の建設などによって綿糸製造高も増加し、1917年には備前の86.4%、合計の

52.3%を占め、1919年には備前の87.0%、合計の55.6%を占めていることが分かる。しかし、倉敷紡績の拡大は、綿糸製造高では備前全体を凌駕し、都窪郡の工産物の比率を高めたが、備中全体の工産比率を押し上げることはできなかったと考えられる。

また、【表 6】に見られるように1919年には、紡績と織物が岡山県における工業製造生産額の75.9%を占めていることからすると、神立が指摘したように繊維産業が岡山県の工業化を推し進めたという点については、異論はないであろう。しかし、備中には倉敷紡績以外に工産比率を上昇させる工業が少なく、備前には工産比率を上昇させる紡績以外の産業が存在していたと考えられるであろう。

## 4. おわりに

明治初期の岡山県は農業が盛んであり、倉敷紡績が設置された備中では実綿生産が盛んであった。特に、備中の窪屋郡や浅口郡は、岡山県内で実綿生産が盛んな地域であり、岡山県の実綿生産の半数以上を占めていた。こうした状況の中、小松原をはじめとする倉敷の青年らによる紡績所設置案が発端となり、1889年に倉敷紡績は設立された。この紡績所設置案は、地元の特産物を活用した紡績所の設置による倉敷の工業化と経済発展という地方の富国を目指したものであり、中村が指摘する地方工業化イデオロギーが存在していたといえるであろう。

明治初期から大正にかけて、岡山県は農業中心から工業

中心の産業構成へと変化したが、工業を主要産業とする岡山県南地域と農業を主要産業とする岡山県北地域といった分布が見られるようになった。さらに、工業化が進行した備中では都窪郡と浅口郡、備前では岡山市と児島郡の工産物構成額が高くなった。備中では倉敷紡績の拡大によって、都窪郡の工産物構成額は上昇し、綿糸製造高は岡山県の半数以上を占めるようになった。つまり、岡山県南部における備中や備前の工業化は、紡績などの繊維工業によって進展したのである。

これらのことから、倉敷紡績の設立・拡大は、岡山県の工産比率を高める要因の1つであったといえるであろう。さらに、倉敷紡績設立に至った背景、当時の岡山県の産業構成及び産業構成の変化の推移などの関係が少なからず明らかになったと考えられる。

しかし、倉敷紡績1社による備中の工産構成額の上昇だけでは備前の工産構成額や工産比率を上回ることができなかったという事実、紡績業を含む繊維産業以外の産業が工業化に影響を与えた可能性が考えられることからすると、備中や備前における産業構成に関して、産業の種類、産業別工場数や職工数、生産額など、より詳細な分析が必要になると考えられる。

(1) 日本の産業革命の始期については、山田盛太郎の生産手段生産部門と消費資料生産部門の確立としてとらえる「二部門定置説」と宇野弘蔵の段階論に基づく「綿工業中軸説」がある。前者を代表するのが大石嘉一郎『産業革命期の研究』であり、後者を代表するのが大内力『日本経済論 上』である。

(2) 中村尚史『地方からの産業革命 日本における企業勃興の原動力』名古屋大学出版会、2010年、pp. 5-35。地方事例として、pp. 70-242で岩手県の日本鉄道会社と地方官、福岡県三池地方の企業勃興と地方企業家、大阪府泉南郡の地方資産家の投資行動などを分析している。

(3) 村はつ「中規模紡績会社の資金調達」『地方金融史研究—地方銀行と地方産業—』地方金融史研究会、1968年。

(4) 大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』日本図書センター、2004年。

(5) 兼田麗子『大原孫三郎の社会文化貢献』成文堂、

2009年。『大原孫三郎-善意と戦略の経営者』中央公論社、2012年。

(6) 土屋喬雄『続日本経営理念史』日本経済新聞社、1967年。

(7) 倉敷紡績株式会社社史編纂委員『回顧六十五年』倉敷紡績株式会社、1953年、p. 13。大橋澤三郎は28歳、小松原慶太郎は25歳、木村利太郎は27歳であった。

(8) 前掲7), pp. 117-119。

(9) 井上伯一編著『倉敷町沿革史』自治社、1926年、pp. 5-6。

(10) 大原孫三郎傳刊行会編集『大原孫三郎傳』中央公論事業出版、1983年、p. 5。

(11) 前掲7), p. 11。

(12) 神立春樹「明治二十一年農事調査」にみる産業の府県別状況『岡山大学経済学会雑誌』27(4)、1996年、p. 5。農業に注目した場合、【表2】の上位4県のほか、新潟県4.28% (物産全体6位)、福岡県4.34% (物産全体7位)、茨木県4.12% (物産全体8位)、福島県3.13% (物産全体9位)があり、岡山県と静岡県(物産全体23位)が3.04%で9位に位置している。

(13) 前掲12) pp. 5-7。上位でも工産構成比が千葉県などは小さく、下位でも22位の山梨県59.5%など大きい場合がある点を指摘している。

(14) 神立春樹「1919(大正8)年の産業の府県別状況」『岡山大学経済学会雑誌』28(1)、1996年、p. 63。

(15) 神立春樹「明治期岡山県地方工業の動向について—その位置づけと検討の方向—」『岡山大学経済学会雑誌』3(3)、(4)、1972年、p. 184-185。耐火煉瓦については、1位の大阪府と少差で2位であり、製鉄業成立・展開の前提となる耐火煉瓦という重要な生産手段部門に占める地位の高さは注目に値する。また、織物業は全国産額中の2.2%で16位であるが、全国各地で展開している中で2.2%であり、重要な機業地であるとしている。

(16) 神立春樹『産業革命期における地域編成』御茶の水書房、1987年、p. 24。